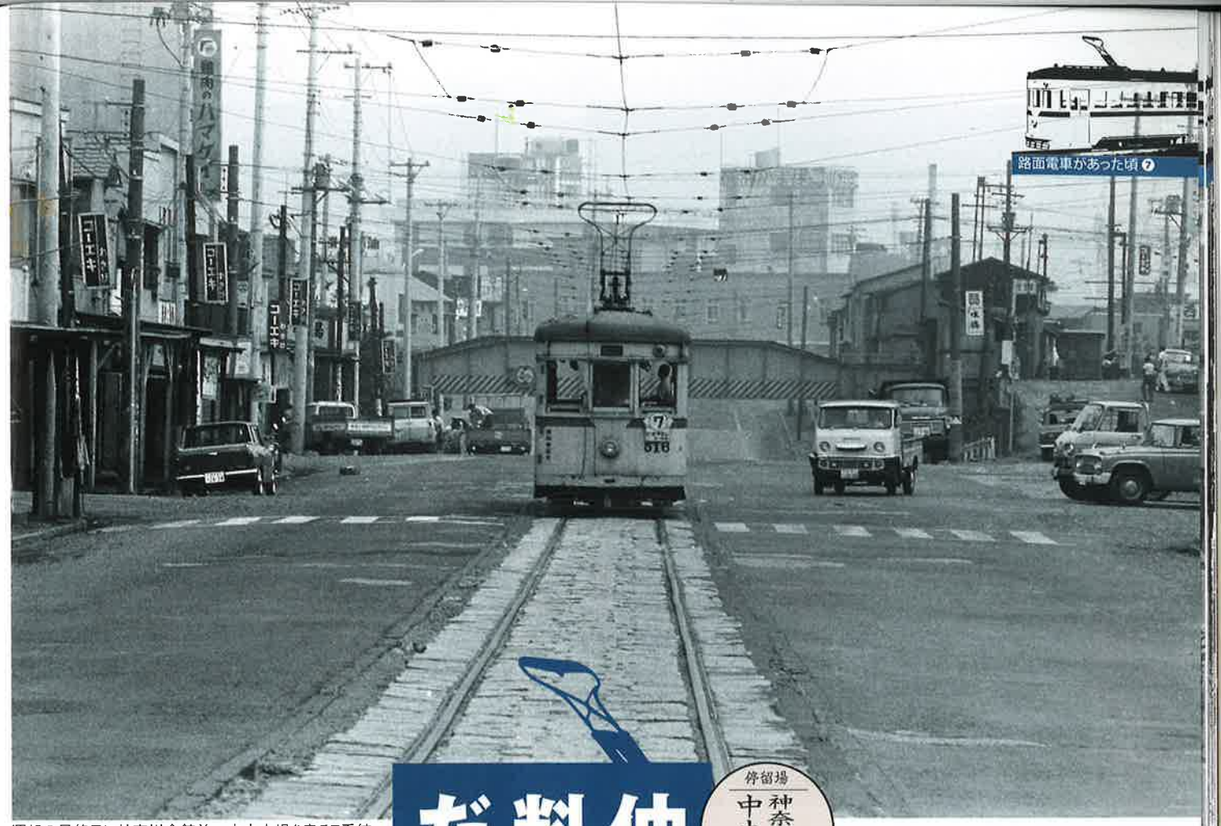


運転の最終日に神奈川会館前―中央市場を走る7系統の市電。奥に見えるのは国鉄の貨物線（高島線）のガード。昭和41（1966）年7月31日、天野洋一撮影

仲買人も食料品も運んだ単線区間

停留場 神奈川会館前 中央市場

かつて中央卸売市場に向けて市電が走った。市場で働く人や仲買人だけでなく、食料品も運んだ。その往年の姿を追うと、今なお変わらない風景に何が見えるのか。

文・写真◎遠藤則男

※現在の地図に当時の路線と停留場（電停）を加筆。神奈川会館前停留場は国道15号上と中央市場線に分岐した中央市場通りの2カ所に存在したので、おおよその位置2カ所に記しています。

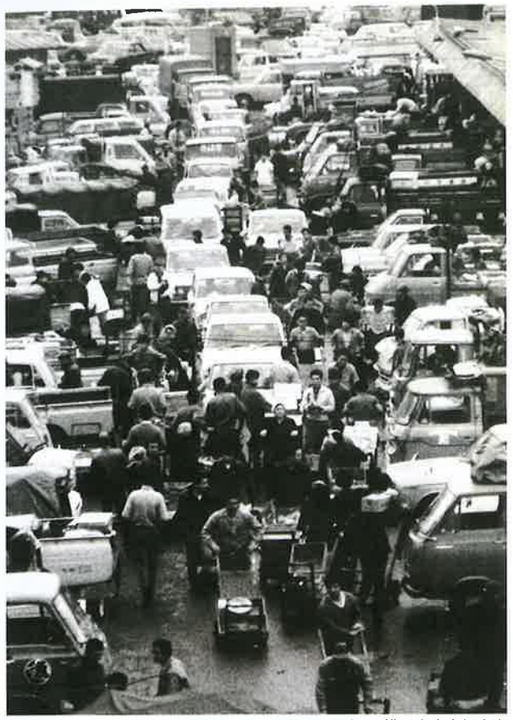
市電に乗って人が集まった

神奈川区に横浜市中央卸売市場が開いたのは、東京の築地よりも4年早い昭和6年。東日本で初、全国でも京都、高知に次ぐ中央卸売市場に、生鮮食料品を求める仲買人や商店主が押し寄せた。開場の翌年、国道上にあった最寄りの滝ノ町停留場は「中央市場前」に改称された。

昭和24年3月、市内が日本貿易博覧会の話題でもちきりの中、国道上の軌道から分岐し、市場の間近まで通じていた引込線を転用して開業したのが「中央市場線」だった。開業前には、市場から鮮魚などの運び出しに使われていた。延長600メートルのうち、分岐付近の100メートルが複線、終点までの500メートルが、横浜市電で唯一の単線区間。終点に7系統が発着する「中央市場」停留場が置かれると、中央市場前はまたも改称されて「神奈川会館前」となった。神奈川会館とは、神奈川公園の角に立っていた欧州の古城を彷彿とさせる建物で、クラシックの演奏会が催される地元のランドマークだった。

中央卸売市場がもっとも活気を見せたのが昭和30年代から40年代にかけて。「市電で乗りつけて、場内に人があふれていましたよ。仕入れた物が3倍で売れた時代ですから、市場の誰もが儲かっていました。昼間から台町の料亭で芸者遊びに興じた連中もいたほどです」

市場近くで業務用の野菜などの配送業を営む「つま正」の小山正武さんは、駆け出しだった頃を振り返る。「忙しくて市電どころではなかったのですが、その当時、活気ある場内は市電の存在に負うところが大きかった」という。



威勢のよい声が飛び交い、食料が景気よく売れて混雑した横浜市中央卸売市場。昭和40年頃、『横浜魚市場卸協同組合創立20周年記念誌』より

万代橋を渡って山内町に入った場所に終点の中央市場停留場があった。辺りは一変し、その痕跡は残っていない。昭和40（1965）年12月31日、天野洋一撮影

中央市場線上の神奈川会館前停留場に停車する7系統の電車。正面に見えるのは幸ケ谷小学校の旧校舎。昭和41（1966）年7月31日、天野洋一撮影

昭和24年生まれの小山正武さんは昭和40年頃から活気に満ちあふれた横浜市中央卸売市場（後方）とともに歩んできた

国道15号との交差点から中央卸売市場方面を望む。中央市場通りを横断して貨物線のガードが架かる光景は今も変わらない

生麦線とともに姿を消した

折箱や弁当箱などの包装資材を取り扱う「オリマツ」の平野孝夫さんは、店の前を通り過ぎる市電を見ながら小中学生の頃を過ごした。「買い出しに来た人が、仕入れ用の大きな籠を手に乗り込んでいましたね」。よく7系統に乗車して出かけたともいう。「夏になると親に連れられ、磯子にあったプリンスホテルのプールに行きました」

国道上にも、本牧方面に向かう2系統と山元町に至る3系統が停まる「神奈川会館前」があった。「伊勢佐木町に出かけるときにも市電を利用しました。うちは野澤屋を贔屓にしていましてね。おそらく2系統で馬車道まで乗り、歩いたのではないでしょうか」

中央市場線には、鉄道ファンにとって気になる場所があった。万代橋を渡る手前で、市電が坂を下って登り返す途中に貨物線をくぐる。この変化に富んだ走行シーンを収めようと、廃止が近づくにつれ、カメラを手に市電を待つ姿が目立つようになった、と聞く。

中央市場線が使命を終えるのは早かった。市電廃止の口火を切って、2系統と3系統が通じた洲崎神社前―生麦間（生麦線）が昭和41年7月を最後に廃止された。生麦行きの最終電車を前に、下駄履きや浴衣姿の市民100人ほどが神奈川会館前に集まり、別れを惜しんだという。同じ日に、分岐していた中央市場線も姿を消した。